

情報モラル教育の授業実践を通じた教師としての学び —SNS ノートながさきを利用して—

田邊 詩織 (10117065)

1. はじめに

内閣府(2018)は、全国における小学生のスマートフォン・携帯電話の所有・利用状況が2010年から2017年の7年間で34.6%増加していることを示した。また、警察庁(2019)によれば SNS(Social Networking Service)が起因となる刑罰に処すべき行為の被害児童は過去5年で26.8%増加している。長崎県教育委員会は、小学生のスマートフォン所持率や SNS による被害の現状を踏まえ、LINE 株式会社と提携し、児童の健全育成を図るための情報モラル教材「SNS ノートながさき」を作成した。なお、本情報モラル教材は長崎・東京の2箇所の教育委員会で作成されており、教材活用を通じた児童の学びを蓄積することで、情報モラル向上の一助となり得ることが想定される。

一方、長谷川(2016)は情報モラル教育を実践するうえでの問題点として、情報モラルの指導法に関する教員の知識不足を挙げた。また指導法改善のためには、情報モラルに関する教員研修の在り方を検討していく必要があると述べ、研修を通して学び続ける必要性を示した。近年、「省察」の重要性が注目されており、中田(2010)は指導力のある教師に成長するための重要な要素のひとつとして「省察(リフレクション)」を挙げている。自己リフレクションは、自分自身と時間をかけて向き合うことができるが、主観や思い込みによって思考に偏りが生じる可能性がある。一方、対話リフレクションは、第三者からの意見を取り入れることで客観的に捉えた自分を知ることができ、自身の成長に繋がるといえる。

以上の背景を踏まえ、本研究では情報モラル教育を実践することによる児童の学びを評価するとともに、自己リフレクションおよび対話リフレクションを通じた教師としての学びを言語化することを目的とする。

2. 実践内容

本実践では、「SNS ノートながさき2」の中学年用、「これって悪口」を使用した。まず、児童らは SNS を使用したコミュニケーションをとることは対面での会話に比べて困難であることを体験した。次に、SNS が必要不可欠な将来において、SNS との向き合い方について考察した。授業冒頭では、LINE の会話を提示し、「おもしろいね」という文字だけでは感情が伝わりにくいことを児童らが感じられるようにした。次に、スタンプが印刷された5枚のカードを児童らが「おもしろい気持ち」と「意地悪な気持ち」の2つに分けた。児童らは、分類したカードの違いについてグループで共有し、分類した根拠や理由について議論した。さらに、学級全体で SNS トラブルが起らない方法について開き合いをした。

3. 評価方法

評価の対象は、本実践に参加した小学4年生27名であった。まず、授業内にワークシートへ記入した自由記述をカテゴリに分類し、児童らの学びを可視化した。さらに、授業後に実施した振り返り

シートを用いて、4件法によるアンケートおよび、自由記述による授業の感想を得た。なお、アンケート調査によって得られた回答を肯定回答と否定回答に分類し、直接確率計算(両側検定)によって分析した。自由記述に関しては、カテゴリに分類することによって、ワークシートと同様に児童らの学びを可視化した。

また、ビデオカメラを教室の前方と後方に設置し、授業全体の様子を撮影した。さらに、360°カメラを使用し、班活動の様子を撮影した。授業中に撮影した動画から児童らの発言を抽出し、本実践における改善点や、良かった点について自己リフレクションおよび、対話リフレクションを行った。

4. 結果・考察

授業後のアンケートの結果、「文章だけでは自分の思っていることが伝わりづらい」に関して、肯定回答が23件、否定回答は3件であった。授業の導入場面で示した「文字だけでは感情が伝わりにくいこと」を児童らは理解できていた。また、「トラブルが起きないためにはどうすれば良いか考えることができた」に関して、肯定回答が26件であった。なお、トラブルを起さないための方法について、すべての児童が授業時間内ワークシートを記入することができた。授業内のワークシートの記述内容から、「トラブルが起きないための方法」に関して、相手の立場になって考えるという回答が18件と最も多く、「感じ方の違いによる SNS トラブルが起らないための良い方法を挙げてみよう」という授業のめあてを理解できていたことが示唆された。

自己リフレクションでは、児童の反応によっては、理解できていないと解釈してしまい、焦りが生じることで話しすぎてしまうことが認識できた。対話リフレクションでは、学習者の意見に共感しすぎてしまい、揺さぶりが少なかったことや、対話をしながら児童の考えを引き出す問いをつくれなかったことが課題として挙げられた。

5. まとめ

本研究は、「SNS ノートながさき」を使用した情報モラル教育の授業実践を通して、児童の学びを評価するとともに、教師としての学びを言語化すること目的とした。その結果、児童らは SNS におけるトラブル回避について思考・共有することで、相手の立場になって考えることができた。また、リフレクションを通して、これまで気づくことができなかった授業中の立ち振る舞いや言動を確認できた。今後の課題は、本実践から得られた知見を筆者の成長につなげるとともに、4月からの教員生活に活かすことである。

参考文献

長崎県教育委員会(2019) SNS ノートながさき2, https://www.educ.news.ed.jp/web_contents/sns_nagasaki/sns_nagasaki2_sho.pdf (参照日 2021. 02. 01)

(指導教員 中村 千秋 : 義務教育開発講座)